

令和3年度坂下公民館主催・利用者研修会

「利用者・地域交流会 ～コロナ禍でも学びをとめないー楽しさがひろがる活動の可能性～」報告書

開催日時：令和4年3月24日（木）10：00～12：00

会 場：坂下公民館 別館1階 会議室2・3

講 師：高井 正 さん

立教大学特任准教授（学校・社会教育講座）・

元足立区社会教育主事など

参加者数：21名（講師・職員含む）

作成：森村 圭介（坂下公民館職員）

1 今がどのような時代か

まず、学びやすい雰囲気をつくることも兼ねて、参加者全員が起立し、目を閉じて心の中で1分間を数え、自分が1分間経ったと感じたら座ることから始まった。人によって41秒から2分までの違いがあったことから、同じことでも人によって受け止め方や感じ方が違うのである。同様に和光市や日本、世界でも多くの人がいることから、価値観の違いが生まれることについて実感を通して、私たちは多様性のある社会に生きていることを学んだ。

つぎに、私たちが生きる現代社会とはどのような時代なのかについて、「人生100年時代」「Society5.0」「VUCA（ブーカ）」「新型コロナウイルス」をキーワードにして学ぶことができ、私たちが人類の長い歴史においてどのような位置にいるのかを確認した。

1955年における平均寿命は男性が63.60歳、女性が67.75歳であったが、今日ではそれが約20歳延びており「人生100年時代」と言われる時代である。そのため、昔の人々の生き方がモデルとして意味をなくしつつあり、人生の選択肢が増加することによるマルチステージ化により、自分で自分の人生をデザインする必要性が求められている。自分はどのような人生を過ごしたいのか、どう幸せになりたいのか、といったことを突き詰めるために生涯学習があり、その学習権を保障するところとして公民館がある。

増加したのは寿命だけでなく技術の進歩もであり、現代は「Society5.0」と呼ばれている。

	社会の内容	日本におけるおおよその時代
Society 1.0	狩猟社会	石器時代～縄文時代
Society 2.0	農耕社会	弥生時代～江戸時代
Society 3.0	工業社会	明治時代～昭和時代
Society 4.0	情報社会	平成時代
Society 5.0	創造社会	令和時代

(表1)

私たちが生きる現代は表1のとおり「Society.5.0」と呼ばれ、例えば人間が入ると自動的に照明が点く公共トイレがあったりするなど、「IoT (Internet of Things)」と「人工知能 (AI)」で、人とモノ、様々な知識や情報がつながる社会となっている。人工知能の研究をしているマイケル・A・オズボーン (オックスフォード大学准教授) によると、2013年の20年後には47%の仕事がAIによる自動化等によってなくなる

と言っており、野村総合研究所とオックスフォード大学の共同研究レポートからは、人工知能やロボット等による代替可能性が高い職業と低い職業がそれぞれ100種あると発表されている。

しかし、人工知能の発展によって新たに生まれる仕事もあり、人々が人工知能と関わることで、新しい文化も育まれてくるのではないかと学ぶことができた。

人工知能の発展のように現代は目まぐるしく変化しているため、「VUCA（ブーカ）」の時代とも言われる。

VUCA の用語	意味
Volatility	変動性
Uncertainty	不確実性
Complexity	複雑性
Ambiguity	曖昧性

(表2)

「VUCA（ブーカ）」の特徴の現代社会は多様性の時代でもあるため、社会や地域における課題を解決するための確実な「正解」はなく、今まで学んだことが通用しなくなる可能性もある。そのため、「VUCA（ブーカ）」という不安定な時代だからこそ、強風でも折れない竹のようなしなやかな強さ（レジリエンス）と、子どもの頃から答えの出ない事態に耐える力（ネガティブ・ケイパビリティ）を育むことが、これから求められるのである。

その「VUCA（ブーカ）」の特徴が明確に表れたのが新型コロナウイルスの脅威と対応である。新型コロナウイルスの感染拡大により物理的距離の保持（フィジカルディスタンス）が求められ、オンライン診療等のようにネット社会が急速に拡大されたり、在宅ワーク（テレワーク）も一般的なものとなった。

新型コロナウイルスのように戸惑うことは、まさしく「VUCA（ブーカ）」の時代そのものであり、時代は常に変化していく。私たちはその時代を生きるため、生涯にわたる学習が今まで以上に必要なのである。

2 変化とともに生きる・学ぶ

新型コロナウイルスの脅威が広がる昨今では、特に集まることが難しくなっている。公民館の役割は「集う・学ぶ・結ぶ」とされているため、普段のサークル活動や地域活動に多大な制限がかかっている。その状況下でも私たちは学びを止めず、どのような工夫をすれば、集い学び合えるのかを学ばなければならない。それは、今までの活

動の仲間や友人関係を保つためにも必要なことである。

集うことが難しくなったコロナ禍において、インターネットを通じて気軽に顔を見合わせる道具として広まったのが、「Zoom」等オンライン会議システムである。電話や手紙等で友人・親戚と通じ合えることができるが、それに加えて、「Zoom」というインターネットを通じた集いにもチャレンジすることを講師は希望した。

実際、「Zoomなんて使えない」と言っていた高齢者が、公民館などでの講座で「Zoom」の使い方を学ぶことによって、「私にもできる」という自信を獲得することが各地であった。

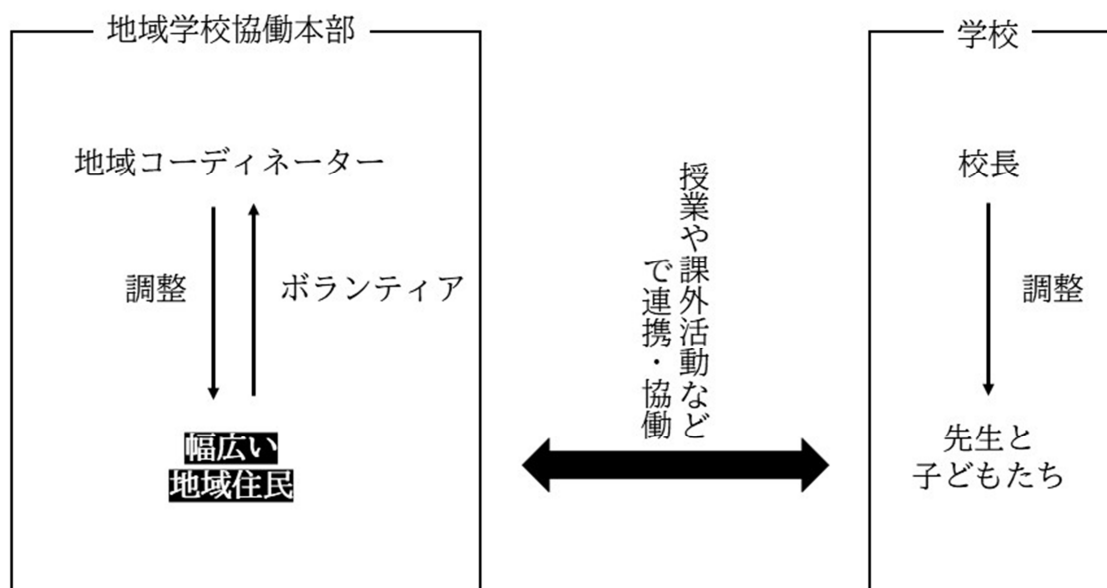
このように、インターネットを通じたオンラインの活用が広がったことにより、遠く離れた人々とも学び合うことが可能となったのである。

その一方で課題も多くある。例えば、そもそもインターネットの契約をしていない人々がいたり、通信環境の不安定さから途中で音声等が乱れたり、さらには対面だとできた「世間話」がしにくい等がある。

しかし、課題があることは当然でもあるため、今は小さくてもできることを少しだけ行い、それが積み重なっていくと、人と人との関係性がより豊かになっていくのである。

3 学校と一緒に地域づくりへ

未来を担う子どもたちの成長を支え、地域をつくっていく活動として「地域学校協働活動」というものがある。これは、地域住民（高齢者・成人・学生・PTA・NPO・自治会・民間企業等）が学校と連携して共に地域づくりを行うことである。例えば、子どもたちの登下校の見守り活動や、学校内の花壇を整備したり、授業で地域の歴史を語る活動など様々である。



(図1) 地域学校協働活動の大まかなイメージ

学校の先生は他の職業を経験したことのない人が多いため、地域には多様な人たちがおり、多くの職業があることを直接的に教えることが難しいことがある。しかし、地域には八百屋やお寺、工場等多くの場があるため、例えば職場体験・職場見学を通して、子どもたちが地域のことを学ぶのである。他にも、子どもたちと一緒に昔遊びをするなど多様な活動があり、それが地域学校協働活動となる。

地域学校協働活動に期待される効果	
子どもにとって	地域住民と顔見知りになれる。 様々な経験をすることができる。
学校にとって	地域とともに学校づくりができる。子どもと向き合う時間が増える。
地域にとって	生きがいになる。 子どもたちと仲良くなって元気になれる。

(表3)

地域住民一人ひとりではできることが異なる。例えば、ある人は登下校の見回りをし、別の人の子育てを支えたり、スポーツや文化(読書や童謡等)を教えることができる。それを受けた子どもたちは地元で愛着が芽生え、成長して仮に地元を離れたとしても、いずれ地元へ帰ってくるという調査結果がある。帰ってきた子どもたちはそのときには大人になっており、地域づくりの主体へと変わっていくのである。

このように、地域住民と子どもたちがわくわく活動できる仕組みとして、「コミュニティ・スクール(学校運営協議会制度)」がある。コミュニティ・スクールとして指定された学校は保護者や地域住民とともに意見交換を行い、①校長が作成する学校運営の基本方針の承認、②教育委員会または校長に学校運営について意見を述べる、③教育委員会に教職員の任用の意見を述べる、という3つの機能がある。例えば、たまたま音楽を専門とした先生がいない場合、コミュニティ・スクールが「音楽の先生を採用するように」と教育委員会に意見を述べ、それが達成できた事例がある。

ただ、令和3年度現在では地域学校協働本部とコミュニティ・スクールは異なる組織であるため、双方が一体的に活動していくことが求められている。

4 私たちの活動がより楽しくなるために

私たち地域住民は自分たちでできることを少しだけすることで、それが次第と大きくなり、地域づくりや子どもの成長へとつながっていく。つまり、私たちが普段しているサークル活動や地域活動が重要なのである。

そこで、私たちの活動の課題を見える化させるため、表4について考えるワークショップを行った。

ステップ	考えるテーマ
ステップ①	私のサークルや活動で解決すべき課題は何か
ステップ②-1	それが解決できなかったとしたら、どのような未来になるのか
ステップ②-2	それが解決したら、どのような未来がまっているのか
ステップ③	解決のための私の行動計画
ステップ④	解決のための私たちの行動計画

(表4)

ステップ③まで進んだところで隣同士と共有し、お互いに違う課題や考えを持っていることを確認することによって、感覚だけでなく考えにも個性があり、多様性があることを実感することができた。

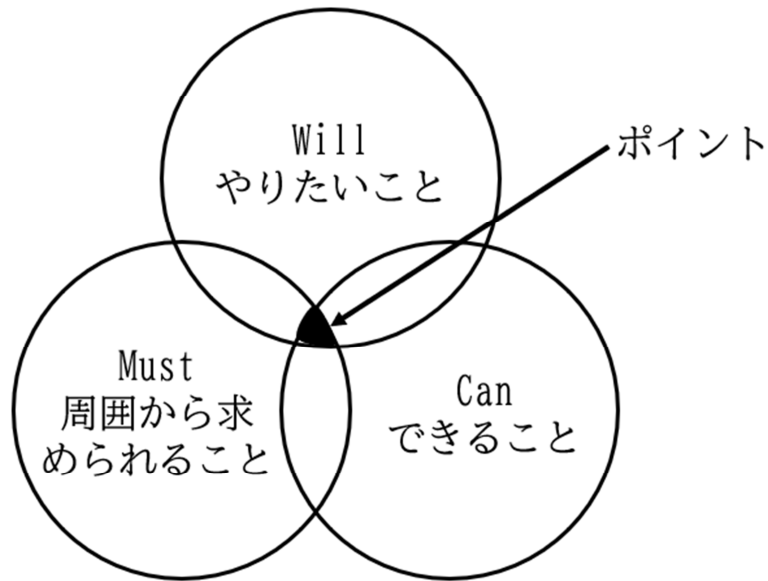
ワークショップでは様々な課題が共有されたが、多くが自分ひとりでは解決できない課題であった。大勢がひとつの課題解決に向け、PDCAサイクルに基づく取り組みがあるが、最近はAARという新しい取り組み方が注目されている。

PDCA				AAR		
P	Plan	計画	→	A	Anticipation	わくわくできる予想
D	Do	実行		A	Action	活動、行動
C	Check	評価		R	Reflection	ふり返り
A	Action	改善				

(表5)

「楽しさ」や「わくわくする気持ち」を大切にし、そこから活動をつくり出していくAARという考え方が登場し、学びに用いられている。楽しさが活動の原点であるため、例えば新しいメンバーを地域活動に誘う際には、「誰でもできるボランティア活動だから参加しない？」ではなく、「ある団体でパソコンで経理ができる人を探しているけどどう？」というように、その人が自分の持つ力を発揮できるかも、とわくわくできるような誘い方が効果的である。

また、公民館や地域で生き生きと楽しく活動を続けるためのポイントは、次ページの図2にあるとした。



(図2)

最後に、コロナ禍でも生活し活動していくためには、生きるために「夢」が必要であるとし、「夢－現実の壁＝生きる力」という公式を導き出した。現実の壁はその時々で低くなったり高くなったりするだろうし、年齢が高くなれば、壁はより厚く高くなる場合が多いだろう。しかし、夢を大きく持ち続けさえすれば生きる力はマイナスにはならない。また、サークル・団体内で夢を共有することで活動し続けることの意欲は、高まっていくことになるのではないだろうか。

そのためにも、①ウォームハート（暖かい心）、②クールヘッド（冷静な判断力・知識）、③ハンド（スキル・能力）から成る「3つのH」を大切にしていこうとし、過去や性格は変えられないが未来や行動は変えることができるため、まずは変えられることから力を注ごうと、講師から激励があり学習会は幕を閉じた。

シート 「私のサークルや活動で解決すべき課題」

2022/3/24

ステップ① 私のサークルや活動で解決すべき課題は何か

Blank dashed box for Step 1.

ステップ②-1 それが解決できなかったとしたら、どのような未来になるのか

Blank dashed box for Step 2-1.

ステップ②-2 それが解決したら、どのような未来がまっているのか

Blank dashed box for Step 2-2.

ステップ③ 解決のための私の行動計画

Blank dashed box for Step 3.

ステップ④ 解決のための私たちの行動計画

Blank dashed box for Step 4.



3/24(木)
10時～12時

内容

新型コロナウイルスの影響、人手不足、会員が増えない、イベントを開いても来てくれないなど、サークル・団体は多様な課題を抱えています。コロナ禍で活動しにくい今だからこそ、ゆるやかに活動することの大切さ、地域で活動することの楽しさを学び合いましょう。当日は講話に加え、課題を見える化できるワークショップも予定しています。生きがいやストレス発散などの活動を守っていくため、気軽に参加してください。

参加無料

講師



たかい ただし
高井 正 さん
・立教大学特任准教授
(学校・社会教育講座)
・元足立区社会教育主事

会場 坂下公民館 別館1階 会議室2・3
対象 坂下公民館登録団体
どなたでも(公民館・コミュニティセンター等で活動していなくても参加できます)
定員 先着30名
持ち物 筆記用具、マスク
注意 新型コロナウイルスの感染対策を実施しつつ開催します。感染状況により、急きょ開催を中止または延期することがありますので事前にご了承ください。その際には、申込者に連絡します。



【問合せ先】 和光市坂下公民館 ☎ 048-464-5230 / 和光市新倉3-4-18

≪講師プロフィール≫ 高井 正 (たかい ただし)

現在の所属：立教大学 学校・社会教育講座

職名：特任准教授

経歴：東京都荒川区生まれ。早稲田大学教育学部教育学科社会教育専修卒業。

学生時代は東京都武蔵野青年の家で所員補佐として4年間活動、また、地元の荒川区で卒業までの2年間、青年教育活動を経験し、1979年、専門職採用試験を受け、社会教育主事補として足立区教育委員会に就職。以来、青年館、社会教育課、女性総合センター、生涯学習課、学校支援課、教育政策課等で36年間、社会教育主事として勤務。

この間、市民の立場では、日本青年奉仕協会（JYVA）の「全国ボランティア研究集会」や「青少年ボランティア活動推進者セミナー」、また、東京ボランティア・市民活動センター（TVAC）の「めっせ」や「フォーラム」等の企画運営に参画。1994年のIAVE世界ボランティア会議や、2011年の第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYOの実行委員もしました。併せて、19年間、立教大学兼任講師を兼業。職員時代は、「公務員としての私」と「市民としての私」との統合を目指してきました。

2015年3月、定年1年前に足立区を退職し、4月より現職に。

社会教育主事任用資格の取得を目指す学生の授業を担当し、社会教育主事としての経験を土台に、参加型で学生とともに作る授業の展開を目指しています。教員となつてからは、大学以外の場では、「学び合いが拓く持続可能な社会 東京コンファレンス」や「学びのクリエイターになる！」（参考 <http://manabic.com/>）の事務局を担当。

子どもが産まれてから草加市に住み、既に30数年経ちました。町会の子ども会づくりや、市の学童保育連絡協議会事務局長くらいしか、草加市には関わってきませんでした。反省し、2015年「そうか市民大学推進委員」の公募に作文を書いて応募し、公開抽選で委員に選ばれました。講座の内容を考えたり、講座当日の受付や案内を担当しています。今も継続していますが、このことをきっかけに、2年前からは、社会教育委員会議の委員になりました。現在、公益財団法人日本学習財団理事、NPO法人VCAS理事、清瀬市社会教育委員、江東区放課後子どもプラン推進委員会委員、第六期豊島区生涯学習推進協議会委員、西東京市公民館運営審議会委員、「月刊社会教育」編集委員などの委員もしています。

近年の執筆：『大都市・東京の社会教育—歴史と現在—』（共著、エイデル研究所、2016年）

『社会教育職員養成と研修の新たな展望』（共著、東洋館出版社、2018年）

『生涯学習支援のデザイン』（共編著、玉川大学出版部、2019年10月）

アクセス



住所 和光市新倉3-4-18

- ・和光市駅北口より徒歩15分
- ・和光市駅北口より東武バスで「新倉坂下」バス停下車 徒歩3分
- ・駐輪場、駐車場あり
- ・ハローサイクリング（電動自転車のシェアサイクリング）の貸出・返却ステーションあり